



# 東風

さいたま市立与野東中学校 学校だより

No.4 令和元年7月1日発行

## 「あい」のあふれる「阿修羅像」

校長 佐藤 和男

梅雨が明けずはっきりしない天候が続く中、期末テストも終了し、部活動や体育の授業では、与野東中生の元気な声が校庭や体育館に響いています。

3年生は6月16日(日)から18日(火)まで2泊3日の京都・奈良方面の修学旅行に行ってきました。お陰様で、3日間を通して大きな事故や怪我もなく目的を十分達成することができました。旅行中、実行委員や班長、室長を中心に計画通りにスケジュールを進め、アクシデントにも良く考えて対応し、行動していました。そしてこの旅行の最中でも、「話し合い」「協力し合い」「励まし合い」「学び合う」等の「あい」のあふれる活動が様々な場面で展開されました。さすが3年生、誠にうれしい限りです。

仏像や歴史的建造物が好きな私にとって、楽しみなことの一つは、奈良・興福寺の「阿修羅像」と京都・広隆寺「弥勒菩薩像」に会う事です。残念ながら今回の修学旅行では、奈良・興福寺の「阿修羅像」には出会うことはできませんでした。しかし、2日目に、三十三間堂で「阿修羅像」を見ることができました。顔がとても穏やかな興福寺のものとは違い、戦いの神様である「阿修羅像」らしい、荒々しい激しい気性が前面に表れた力強い仏像でした。以前から私は、戦いの神なのに、興福寺の「阿修羅像」はどうしてあのような少年の顔で穏やかな、そして悲しげな表情をしているのか不思議でした。そこには奈良時代の聖武天皇の後・光明皇后の悲しい想いが込められているそうです。光明皇后は病気や身寄りのない人のために社会福祉施設を作るなど、慈愛の人でした。すなわち、「あい」のあふれる方であったという事です。そんな彼女と聖武天皇の間に、待望の男の子が生まれました。聖武天皇は生後二ヶ月の赤ちゃんを皇太子にしました。しかし、その子は生まれてから体が弱く、皇后は我が子の回復を観音菩薩に願いました。しかし願いはかなわず、子どもは亡くなったそうです。信心深い彼女は、供養のために興福寺に30体の仏像を収めました。そこにあの悲しげな表情の阿修羅像が含まれていました。阿修羅像は、八部衆という八体のグループの中の一体ですが、興福寺八部衆の仏像はどれもみな、こどものような幼い表情です。こうしてみると、なぜ戦いの神である阿修羅が少年であり悲しげな表情をしているのか、分かるような気がします。これらの仏像は、子を思う親のとても深い「愛(あい)」が込められた姿なのでしょう。

さて、6月1日(土)からは、運動部のさいたま市中学校総合体育大会が行われました。県大会や全国大会に繋がる大会でしたが、3年生にとっては最後の公式試合になりました。どの部活動も最後まであきらめずに、全力で戦ってくれました。感動をたくさんもらいました。また夏休みにかけては、文化部のコンクールや発表会、展覧会なども予定されています。最後の締めくくりを精一杯取り組んでほしいと思います。

期末テストも終わり夏休みまで約3週間です。2学期の始業式で、夏を通して様々な面で成長した子どもたちに会えるのが今から楽しみです。

保護者、地域の皆様、1学期間ありがとうございました。



